

超常現象に対する肯定的信念の形成に関する研究 (2)

— 社会・心理的要因の影響を中心に —

坂田 桐子・岩永 誠

広島大学総合科学部人間行動研究講座

Preliminary research on the dominant factors in paranormal beliefs (2): Effects of social — psychological factors

Kiriko SAKATA and Makoto IWANAGA

*Department of Behavioral Sciences, Faculty of Integrated Arts and Sciences,
Hiroshima University*

Abstract : The purpose of this paper is to examine effects of dominant social-psychological factors on paranormal belief. I focused three explanatory variables: attitude toward science, mass media use and interpersonal communication about paranormal phenomena. Four hundred and eighty-two undergraduates (225 women and 257 men) completed the paranormal belief scale, the attitude toward science scale, questions about their mass media use, and questions about their interpersonal communication about paranormal phenomena.

By factor analysis, paranormal belief was classified into four groups: supernatural power, ghost and reincarnation, superstition, and existences of undefined creatures and cultures. As a result of multiple regression analysis, paranormal belief were positively associated with the acceptance of those phenomena in interpersonal communication. Belief about supernatural power and belief about ghost and reincarnation were also associated with a factor in attitude toward science, spirituality. Women and men were very different from each other in dominant factors on belief in superstition and belief in existences of undefined creatures and cultures.

Key words : paranormal belief, attitude toward science, mass media use, interpersonal communication about paranormal phenomena

問 題

本研究は、超常現象に対する肯定的信念を形成・維持すると思われる要因のうち、特に社会・心理的要因の影響に焦点を当てるものである。

超能力、心霊現象、占い、宇宙人など、いわゆる「現在の科学では解明できない不思議な現象」や、一見、科学的な装いを凝らしながら、その実科学的根拠に欠ける疑似科学的な学説（血液型性格判断や超古代文明等）を信じる青年は多い。このような現象は、超常現象、超自然現象、オカルト、迷信、疑似科学、神秘現象、および不思議現象等々、さまざまな名称で呼ばれているが、本研

究では、以下、これらを総合して「超常現象」と呼ぶこととする。

超常現象への信奉度について、松井(1997)は、ライフデザイン研究所が1991-1995年の間に首都圏の高校生を対象として実施した意識調査データを再分析し、「超能力」や「占い」は回答者の2～3割、「霊」については4～5割という無視できない数の高校生が信じていることを報告している。また、NHK放送文化研究所が行っている全国16歳以上の男女5400名余を対象とした調査によると、「お守り・おふだの力」や「あの世・来世」を信じる人は1973年時点から漸増しており、特に1960年代半ば以降に生まれた世代で信じる人が多い(いずれも2割強; NHK放送文化研究所、1998)。こうした超常現象の真偽はともかく、科学的世界観とは次元を異にする「精神世界」への関心や、超常現象への肯定的態度が青年の間に普及しつつあることは確かなようである。

青年層の超常現象への傾倒は何を意味しているのであろうか。超常現象ブームは、思考停止や非合理主義の蔓延を意味している(例えば、安斎,1995)と考えられる一方で、現代青年のオカルト信仰には非合理的思考や不適応という否定的側面だけではなく、既存概念の打破や価値観の刷新へと向かう建設的な機能もあわせもっているという指摘(中村,1998)もある。超常現象の流行が意味するところはこのように複雑である。小学校の段階から理科教育を受け、ある程度の科学的知識を保有しているはずの多くの若者が、なぜこうした科学的裏付けのない超常現象に興味を持ち、傾倒するようになるのか、そのプロセスと規定要因が明らかにされるべきであろう。どのような社会的・心理的要因から超常現象に対する肯定的な態度が形成・維持されるのか、またその態度はどのような心理的機能を果たしているのか、といった社会・心理的規定要因を探究する過程で、超常現象ブームのもつ意味も自ずと明らかになると思われる。

超常現象に対する肯定的態度が形成・維持される過程にアプローチした研究はそれほど多くはないが、その中から以下のような点が示唆されている。

(1)超常現象の構造:松井(1997)は、ライフデザイン研究所が首都圏の高校生を対象として実施した意識調査データを数量化Ⅲ類によって分析し、マスコミで話題になることの多い超常現象が次の4群に分類できることを見出した。①「占い」「おまじない」「手相」「血液型性格判断」から成る「占い」系、②一見、科学的な印象を与える「超能力」や「UFO」から成る「擬似科学」系、③「たたり」「神仏」「神社のお守り」から成る「旧来宗教」系、④前世、霊、死後の世界から成るグループ。第4群は、「旧来宗教系」と「疑似科学系」の中間に位置しているため、科学的装いと宗教的意味付けの2つの側面をもつと考察されている。また、中島ら(1993)は、首都圏の私立大学生を対象とした調査により、93項目の超自然現象から「迷信」「霊」「超能力」「超生命・超文明」の4因子を抽出している。

(2)超常現象信奉者のパーソナリティ:野村(1989)は、権威主義的パーソナリティがその行動傾向の一特徴として「迷信的所信」を包含していることを指摘し、権威主義的パーソナリティの持ち主が迷信に陥りやすいことを示唆している。

(3)超常現象を信奉する心理的背景:上述の松井(1997)の分析から、宗教への関心が強いほど、また、科学の進歩に疑問をもち、科学には限界があるという「科学限界感」を強く抱いているほど、超常現象を信じやすいことが示されている。この結果は、岩永・坂田(印刷中)でも支持されている。また、中村(1998)は、オカルト信仰者はオカルト懐疑者よりも将来の社会状況に対するイメージが否定的であることを見いだしている。

(4)マスコミの影響:不思議現象を信じる高校生は、超常現象、SF、ファンタジーなどを扱うテレビ番組だけでなく、アニメ・お笑いなどの娯楽番組全般をよく見るという報告がある(松井,1997)。

(5)超常現象の機能：野村(1989)によれば、超常現象の信奉は娯楽としての機能や疑似カウンセリング的な機能をもつことがある。例えば、占いなどの運勢判断の実行は、それが的中すると信じているからではなく、興味本位に自己の運勢を占うという娯楽性を求める心理によるものである。また、占い師が人生相談におけるカウンセラーの役割を果たしている側面もある。佐藤ら(1992)は、血液型性格関連説について、血液という誰もが持っているものを会話の中に持ち込むことによって、会話成員の全員が話題の中心になって盛り上がるができるという、対人関係促進機能があることを指摘している。このような機能は、必ずしも超常現象を信じていない個人が「話のネタ」としてそれを話題にし、超常現象に関する社会的現実感を作り出すことによって、結果的に超常現象に対する肯定的態度を維持・強化していく過程が存在することを予想させる。

(6)超常現象信奉度の性差：多くの調査から、超常現象信奉度に性差があることが報告されている。上述の松井(1997)の調査では、全般的に女子の方が男子より超常現象を信じやすいが、UFOだけは女子より男子の方が信じているという結果が見出された。また、超常現象信奉度の規定要因も男女で異なり、男子では宗教関心の高さ、科学限界感の強さ、学校適応の良さ、および問題行動念慮の高さが、女子では宗教関心の高さ、科学限界感の強さ、および同調性の高さが、超常現象信奉度にプラスに関連していた(松井,1997)。中島(1993)は、霊因子と超能力因子について女子の方が男子より信じていることを見出している。これらの性差がなぜ生じるのかは、現在のところ不明である。

これらの知見から、つぎの3点が予想される。

第一に、科学限界感やその打開策としての精神世界への興味といった何らかの「科学観」が、超常現象に対する肯定的態度を規定する主要な要因となっている可能性がある。松井(1997)や岩永・坂田(印刷中)は、「科学への限界感」が超常現象信奉度を規定することを見出しているが、科学に関する態度はもっと複雑な構造を成している可能性がある。例えば、科学が必ずしも人間を幸福にしないという科学への限界感や不信感があってもそれが精神世界への興味に直結するわけではなく、科学への限界は特に感じていないが同時に精神世界への興味ももっている、という状態もあり得る。また、科学の限界やマイナス面を認識する一方で、「もっと科学が進歩すればこの状況を打開できる」と考える科学万能感が存在する場合もあるであろう。このように、科学観を多面的に把握して超常現象信奉度との関連を検討する必要があると思われる。

第二に、一口に「超常現象」と言ってもその中にはいくつかの下位群があり、それぞれに肯定的態度形成過程が異なる可能性がある。先行研究から考えると、上述した科学観以外に、マスコミとの接触頻度、および超常現象が他者との会話に上る頻度が、超常現象に対する肯定的態度の形成・維持に関与していると思われる。これらの要因の相対的重要度は、超常現象の下位群ごとに異なるであろう。例えば、霊魂に関する態度は科学限界感や精神世界への興味から派生するが、超古代文明や超能力など一見科学的に見える超常現象は、むしろマスコミから得る知識などが基盤になっているため、マスコミとの接触頻度が主要な規定因であるかもしれない。

第三に、先行研究で超常現象に対する肯定的態度にはほぼ一貫した性差が認められていることから、超常現象信奉度の形成因や形成過程が男女で異なる可能性がある。これらが性役割社会化によるものか、もしくは他の何らかの要因の影響を受けているのかを解明する手掛りとして、超常現象信奉度の形成因にどのような性差が見られるかを検討する必要がある。また、超常現象に対する態度や科学観は、受けてきた科学教育の程度によって異なることが考えられる。高校で理系教育を受け、大学でも理系の専門知識を修得しようとする者は、そうでない者に比べて科学不信感が弱く、超常現象に対して否定的であることが予想される。

以上の予測に基づいて、本研究では、大学生の超常現象に対する肯定的態度の社会・心理的形成因を検討する。具体的には、①科学および精神世界への肯定的・否定的態度を測定するための科学観尺度を作成し、②科学観、超常現象を取り扱うマスメディアへの接触頻度、および身近な人々との話題の中で超常現象が肯定的に取り扱われる程度と超常現象に対する肯定的態度との関連を検討する。また、③上記②を超常現象の種類別に検討することで、それぞれの超常現象への肯定的態度がどのような心理的背景に基づくものであるのかを吟味する。なお、性差と専門分野（理系・文系）の差についても併せて検討する。

方 法

回答者 一般教養の心理学および行動生理学を受講する大学生492名。うち、回答に不備があった10名の回答を除外し、482名を分析対象とした。回答者の内訳は、理系男性125名、理系女性127名、文系男性132名、文系女性98名であった。以下の質問項目から成る質問紙を1998年4月の第1回目の講義終了時に実施し、その場で回収した。

質問項目

(1)超常現象信奉度：「迷信」「霊」「超能力」「超生命・超文明」各5項目から構成される超自然現象信奉尺度全20項目(中島,1993)。「仏滅に結婚式を行なうとよくないことがある」「霊界は存在する」等の各項目について、「そう思う(5)ーそう思わない(1)」の5段階で回答させた。

(2)科学観：科学に対する否定的・肯定的な意見項目や、精神世界に関する意見項目から成る全15項目。ライフデザイン研究所(1994)で使用された項目を参考にした他、科学に関するディスカッションによって項目を収集した。

(3)マスメディア接触度：(a)超常現象を「科学では解明できない不思議」として扱うマスメディアに接触する頻度、および(b)一見、不思議に見える現象を科学的に解明しようとするマスメディア、もしくは科学的知識を紹介するマスメディアに接触する頻度、を測定した。(a)と(b)の区別を設けたのは、同じ不思議な現象を扱うマスメディアでも、その扱い方によって視聴者の超常現象信奉度に及ぼす影響の方向性が異なると考えたためである。すなわち、(a)は超常現象への肯定的態度を促進するが、(b)は促進しないと思われる。

具体的には、(a)に含まれるものとして、「あなたは、超常現象や奇跡体験などの不思議な実話を紹介するテレビ番組をよく見る方ですか」「あなたは、超常現象や奇跡体験などの不思議な現象を紹介する雑誌をよく読む方ですか」の2項目を、(b)に含まれるものとして、「あなたは、テレビの科学番組や、不思議な現象を科学的に解明しようとするテレビ番組をよく見る方ですか」「あなたは、科学雑誌をよく読む方ですか」という2項目を設定した。テレビ番組の視聴頻度を問う項目に対しては「まったく見ない(0)ーかなりよく見ている(週に1回以上)(5)」の5段階で、また雑誌を読む頻度を問う項目に対しては「まったく読まない(0)ー月に2冊以上読む(5)」の5段階で回答させた。

(4)超常現象が話題になる頻度とその内容：過去3ヶ月の間に親しく付き合った人々との会話の中で、「迷信」「霊」「超能力」「超生命・超文明」に含まれる事柄が話題に上った頻度と、その話題の中での取り上げられ方が肯定的か懐疑的かを回答させた。具体的には、「仏滅や大安などのお日柄」「血液型による性格判断」「幽霊」「前世・来世・生まれ変わり」「超能力」「心霊治療」「ムー大陸・超古代文明」「宇宙人・UFO」の8項目について、「頻繁に話題になる(4)ー話題になることはない(0)」の5段階で回答させた後、「話題になることはない(0)」以外の項目について、その会話の中での取り上げられ方を「肯定的なことが多い(3)」「半々くらい(2)」「懐疑的なことが多い(1)」

の3段階で回答させた。なお、上記8項目は、上述の超自然現象信奉尺度(中島,1993)から、「迷信」「霊」「超能力」「超生命・超文明」に該当する項目を選んでそれぞれ2項目ずつにしたものである。

(5)その他：対人関係に関する項目や個人特性に関する項目も含まれているが、ここでは分析しない。

結 果

1. 科学観尺度と超常現象信奉度尺度の検討

科学観尺度15項目について主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を行った結果、Table 1に示す4因子が得られた。

第1因子は、科学が進歩しても幸福になれないという科学限界感や、科学のマイナス面を表す項目から構成されているため、「科学不信感」を表す因子と解釈できる。第2因子は、科学がもっと進歩・普及すればあらゆる問題が解決でき、幸福になれるという意識を表す因子と解釈できる。これを以下「科学万能感」因子と呼ぶ。第3因子は、信仰や精神世界を重視する内容の項目から構成されているため、以下、これを「精神世界重視」因子と呼ぶ。なお、第4因子は「科学は人類の進歩発展に大いに貢献してきた」の1項目しか高く負荷していなかったため、以下の分析から除外する。

各因子に含まれる項目のうち、因子負荷量が.40未満の2項目(項目11,15)を削除し、各因子の α 係数を算出したところ、「科学不信感」「科学万能感」共に $\alpha = .69$ 、「精神世界重視」については $\alpha = .60$ であった。「精神世界重視」の内的一貫性がやや低いことを念頭に置いた上で、各因子に含まれる項目得点の合計値を算出して分析に用いることとした。

Table 1. 各科学観項目の因子負荷量

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子： 科学不信感				
5 これ以上、科学が進歩しても人類は幸福になれない	.674	.019	.016	-.271
2 科学が人類を幸福にした面よりも不幸にした面の方が大きい	.666	.017	.125	-.081
8 人類は、科学の進歩とひきかえに多くのものを失った	.556	-.063	.130	.234
14 科学を重視しすぎると、世の中がギスギスして夢がなくなる	.512	-.203	.199	.066
11 何でも科学的に解明しようとするのは間違いである ^a	.398	-.384	.217	.097
第2因子： 科学万能感				
1 科学がもっと進歩すれば、世界中のあらゆる問題が解決されるはずだ	.045	.682	.020	.143
4 世の中には科学で説明できないものはない	.006	.634	-.107	-.028
10 皆が科学的な思考法を身につければ、人類はもっと幸せになると思う	-.119	.539	.358	.040
13 人類の未来が明るくなるかどうかは、科学がどれだけ進歩するかにかかっている	-.235	.519	.130	.093
第3因子： 精神世界重視				
9 人間が幸福になるには、信仰が欠かせない	.044	.163	.685	-.026
3 宗派は何であれ、神や仏を信じることは非常に大切である	.041	.116	.537	.012
6 人々は、もっと精神世界を重視するべきである	.271	-.106	.438	-.072
12 人間は何らかの哲学をもって生きるべきだ	.114	-.043	.412	.127
15 人々の生活を本当に豊かにするのは、芸術や文学である ^a	.298	-.095	.394	.008
7 科学は人類の進歩発展に大いに貢献してきた ^b	-.034	.160	.035	.775
寄与率 (%)	20.7	15.9	9.6	8.0

a: これらの項目は、因子負荷量が.40未満で、かつ他の因子にも高く負荷しているため、尺度化の際には削除した。

b: 第4因子には項目7しか高く負荷していなかったため、尺度化の際には除外した。

つぎに、超常現象信奉尺度20項目について、主因子法による因子分析を行った後、バリマックス回転を施した結果をTable 2に示す。項目16が第4因子ではなく第1因子に含まれている点などを除いて、中島(1993)や岩永・坂田(印刷中)とほぼ同じ因子構造が確認された。第1因子は「超能力」、第2因子は「霊」、第3因子は「迷信」、第4因子は「超生命・超文明」に対する信奉度をそれぞれ表すと解釈できる。 α 係数は、「超能力」で.83、「霊」.88、「迷信」.78、「超生命・超文明」.74、と十分に高いことが確認された。信頼性の検討の結果、項目16を削除し、各因子に含まれる項目得点の合計値を算出した。

Table 2. 各超常現象項目の因子負荷量

項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子： 超能力				
11 物体を精神の力で浮揚させることのできる人がいる	.822	.210	.099	.150
3 念力で物体を動かすことができる	.809	.258	.106	.185
7 念力でスプーンを曲げることのできる人がいる	.724	.189	.073	.190
15 精神の力で他人の病気を治すことのできる人がいる	.435	.297	.122	.194
19 呪文を使うことによって人に呪いをかけることができる	.337	.233	.320	.282
16 ネス湖の怪物（ネッシー）は存在する ^a	.319	.121	.258	.191
第2因子： 霊				
18 体は死んでも魂は生き続ける	.159	.684	.255	.163
2 死者の霊は存在する	.317	.673	.254	.137
6 霊界は存在する	.309	.642	.195	.275
14 前世や来世は存在する	.203	.626	.292	.204
10 霊が人に憑依することがある	.387	.594	.288	.188
第3因子： 迷信				
9 手のひらの生命線が長いと長生きする	.164	.195	.674	.050
13 北枕にして寝るとよくない	.039	.120	.661	.137
1 仏滅に結婚式を行うとよくないことがある	.111	.135	.636	.151
5 神社にお参りをすれば願い事がかなう	.102	.278	.613	-.066
17 血液型によって性格を知ることは可能である	.036	.097	.478	.010
第4因子： 超生命・超文明				
4 古代文明には宇宙人が関係している	.213	.159	-.052	.713
20 ナスカの地上絵は宇宙人に対するメッセージである	.115	.155	.204	.640
12 政府は宇宙人に関する事実を隠している	.134	.093	.061	.608
8 ムー大陸は存在した	.287	.255	.060	.422
寄与率 (%)	35.5	10.8	7.2	5.9

a: この項目は、信頼性の検討において他項目との一貫性が低かったため、尺度化の際には削除した。

2. 超常現象信奉度、科学観、マスメディア接触度、および会話の実態

各変数の平均得点を、回答者の性別または専門分野別（文系・理系）に検討した（Table 3）。いずれの尺度においても、専門分野による得点の差はほとんど認められず、性差が顕著であった。

平均値を見る限り、男女とも超常現象を信奉する程度はそれほど高いとは言えないが、男性より女性の方が、超能力、霊、および迷信を信奉する程度が高い。これは、従来の知見と一貫した結果

である。また、科学観については、女性の方が男性より科学不信感が強く、科学万能感が低いことがわかる。つまり、女性の方が男性より科学に対して否定的な意識を有している。精神世界重視の程度については、性別と専門分野の交互作用が有意であった($F(1,470)=5.22, p<.05$)。男性については文系の方が理系より精神世界を重視するが、女性には専門分野による差が認められない(Table 4)。

マスメディア接触度については、4項目間の相関がいずれも $r=.36\sim.47$ とやや高く、超常現象を「科学で解明できないもの」として扱うマスメディアと「科学的に解明しようとする」マスメディアに分離して扱うことの妥当性が疑わしいため、4項目の得点を合計して、0~16点までの得点範囲をもつマスメディア接触度として扱うこととした。4項目間の相関が予想外に高かったことは、超常現象を「科学では解明できないもの」として扱うマスメディアに接触する人が、同時に「科学的に解明しようとする」マスメディアにも接触する傾向があることを示唆している。Table 3 から、女性より男性の方がマスメディアによく接触していることがわかる。また、性別と専門分野の交互作用があり($F(1,476)=12.89, p<.001$)、文系では性差がほとんど認められないが、理系では性差が顕著である(Table 4)。

会話の中で超常現象がどれほど肯定的に扱われているかを数値化するため、各項目について「超常現象が話題になる頻度」と「その内容」の積を算出し、これを会話中の「肯定度」とした。すなわち、超常現象が話題になる頻度が高く、かつ内容が肯定的であるほど肯定度が高くなり、まったく話題にならないければ肯定度は0である。さらに、「超能力」と「心霊治療」の肯定度を合計したものを「超能力の肯定度」とし、以下同様に「幽霊」と「前世・来世・生まれ変わり」の合計を「霊の肯定度」、「仏滅や大安などのお日柄」と「血液型による性格判断」の合計を「迷信の肯定度」、「ムー大陸・超古代文明」と「宇宙人・UFO」を合計して「超生命・超文明の肯定度」とした。Table 3 から、会話における肯定度は総じて低く、「迷信」以外では性差も専門領域による差も有意でないことがわかる。「迷信」については性別の主効果が有意であり、女性の方が男性より会話における肯定度が高い。

Table 3. 性別および専門領域別に見た諸変数の平均得点

	得点範囲	性別		性別の 主効果	専門領域		性別と 専門領域の 交互作用	
		男性 (N=257)	女性 (N=255)		文系 (N=252)	理系 (N=230)		
超常現象信奉度								
超能力	5-25	11.0	12.3	**	11.8	11.5	ns	ns
霊	5-25	13.5	16.1	**	14.9	14.6	ns	ns
迷信	5-25	12.1	14.1	**	13.1	12.9	ns	ns
超生命・超文明	4-20	10.1	10.0	ns	9.9	10.1	ns	ns
科学観								
科学不信感	4-20	12.5	13.5	**	12.9	13.1	ns	ns
科学万能感	4-20	9.5	8.0	**	8.7	8.9	ns	ns
精神世界重視	4-20	12.0	11.7	ns	12.1	11.6	+	*
マスメディア接触度								
マスメディア接触度	0-16	6.0	4.8	**	5.4	5.5	ns	**
会話における超常現象肯定度								
超能力	0-24	1.2	1.0	ns	1.1	1.0	ns	ns
霊	0-24	2.1	2.5	ns	2.6	2.0	+	ns
迷信	0-24	2.6	4.3	**	3.4	3.3	ns	ns
超生命・超文明	0-24	2.2	1.8	ns	2.2	1.8	ns	ns

注：+ $p<.10$ ； * $p<.05$ ； ** $p<.01$

Table 4. 「精神世界重視」と「マスメディア接触度」の平均値

	文系		理系	
	男性 (N=131)	女性 (N=98)	男性 (N=124)	女性 (N=127)
精神世界重視	12.5	11.6	11.4	11.8
マスメディア接触度	5.6	5.3	6.5	4.5

注： 表中の数値は平均値である。
いずれの変数についても、性別×専門領域（文系・理系）の交互作用が有意である。

3. 超常現象信奉度の規定因の検討

超常現象信奉度に性差が認められたことから、超常現象信奉度の規定因については男女別に検討する。「超能力」「霊」「迷信」「超生命・超文明」の各信奉度を外的基準とし、科学不信感、科学万能感、精神世界重視、マスメディア接触度、および会話における当該現象の肯定度を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。各変数間の相関をTable 5に、重回帰分析の結果をTable 6, Table 7に示す。

Table 5から、各説明変数間の相関は総じて低いことが確認された。Table 6, Table 7を見ると、男女とも会話における肯定度がすべての超常現象信奉度に寄与していることがわかる。いずれも、会話における肯定度が高いほど超常現象信奉度が高い。

男性については、会話における肯定度の他に、精神世界重視の程度がすべての超常現象信奉度に寄与しており、精神世界を重視するほど超常現象信奉度が高いことがわかる。その他に、「超能力」についてはマスメディア接触度が、「超生命・超文明」については科学不信感が、それぞれ寄与している(Table 6)。男性の場合、超常現象の種類による規定因の違いはそれほど顕著ではなく、いずれの超常現象についても会話における肯定度と精神世界重視の程度が信奉度の規定因となっている。

Table 5. 重回帰分析に用いた変数間の相関係数

	PN1	PN2	PN3	PN4	S1	S2	S3	MD	C1	C2	C3
超常現象信奉度											
PN1 超能力											
PN2 霊	.63										
PN3 迷信	.33	.50									
PN4 超生命・超文明	.48	.47	.23								
科学観											
S1 科学不信感	.12	.28	.20	.24							
S2 科学万能感	-.04	-.13	.14	.09	-.12						
S3 精神世界重視	.29	.35	.23	.28	.26	.09					
MD マスメディア接触度	.13	.03	-.07	.24	-.02	.07	.14				
会話における肯定度											
C1 超能力の肯定度	.27	.20	.04	.26	.01	-.04	.15	.24			
C2 霊の肯定度	.23	.29	.06	.25	.07	-.09	.20	.13	.58		
C3 迷信の肯定度	.09	.18	.35	.16	.07	.08	.18	-.01	.21	.29	
C4 超生命・超文明の肯定度	.13	.16	.00	.40	.07	.05	.23	.31	.56	.50	.25

一方、女性については、超常現象の種類によって規定因が異なっている(Table 7)。「超能力」については、会話における肯定度の他に精神世界重視の程度が、「霊」については精神世界重視の程度と科学不信感がそれぞれ寄与している。「迷信」については、科学不信感と科学万能感がいずれもプラスに寄与しており、その他にマスメディア接触度がマイナスに寄与するという、複雑な結果となっている。この部分の解釈については後述する。

「超生命・超文明」については、会話における肯定度の他にマスメディア接触度だけがプラスに寄与していた。

総合すると、いずれの超常現象信奉度についても、会話における肯定度が重要な規定因となっていることが示唆される。また、男性と女性で同じ超常現象の規定因が異なることが示された。

Table 6. 超常現象信奉度を外的基準とした重回帰分析の結果(男性回答者)

説明変数	外的基準			
	超能力	霊	迷信	超生命・超文明
科学観				
科学不信感				.22 ***
科学万能感				
精神世界重視	.30 ***	.39 ***	.30 ***	.18 **
マスメディア接触度	.12 *			
会話における肯定度	.23 ***	.23 ***	.27 ***	.33 ***
自由度調整済みR ²	.19 ***	.24 ***	.19 ***	.23 ***

注： 表中には有意な標準偏回帰係数とその有意水準のみ示している。

* p<.05; ** p<.01; *** p<.001

Table 7. 超常現象信奉度を外的基準とした重回帰分析の結果(女性回答者)

説明変数	外的基準			
	超能力	霊	迷信	超生命・超文明
科学観				
科学不信感		.25 ***	.24 ***	
科学万能感			.20 **	
精神世界重視	.16 ***	.17 **		
マスメディア接触度			-.14 *	.15 *
会話における肯定度	.24 ***	.14 *	.23 ***	.35 ***
自由度調整済みR ²	.08 ***	.15 ***	.16 ***	.17 ***

注： 表中には有意な標準偏回帰係数とその有意水準のみ示している。

* p<.05; ** p<.01; *** p<.001

考 察

本研究から、超常現象の種類および性別によって諸規定因の相対的重要度が異なることが確認された。本研究で取り上げた超常現象は、中島(1993)と同様の4種類に分類された。本研究で取り上げた規定因のうち、男女に共通して4種の超常現象信奉度すべてに寄与していたのは、会話におけ

る肯定度であった。これ以外の要因について、男女別に考察する。

男性については、超常現象の種類に関係なく精神世界重視の程度が有意に寄与しており、「超生命・超文明」を除いて標準偏回帰係数も大きかった。その一方で、先行研究と異なり、科学不信感や科学万能感は重要な規定因とはなっていない（「超生命・超文明」を除く）。このことは、男性の場合、たとえ科学に対する信頼度が高くても、同時に精神世界を重視していれば超常現象全般に対する肯定的態度が形成され得ることを示している。

一方、女性については、精神世界重視の程度は「超能力」と「霊」に寄与するのみであり、標準偏回帰係数も大きくない。代わりに、科学不信感が「霊」と「迷信」に影響しており、精神世界を重視するかどうかよりもむしろ科学に対する信頼があるかどうかによって超常現象信奉度が規定されていると言える。さらに、「超生命・超文明」には科学観はまったく影響せず、マスメディアと会話という情報接触にのみ影響されている。男性の場合と比較すると、女性の超常現象への肯定的態度に精神世界への重視の程度が及ぼす影響は小さいようである。

また、女性については、「迷信」の規定因が他の超常現象と異なって特徴的であった。科学万能感が高いほど、またマスメディア接触度が低いほど、「迷信」に対して肯定的であることは、一見、予測と矛盾した傾向に見える。これは、科学万能感、マスメディア接触度の低さ、および「迷信」のいずれとも正の関連をもつような第3の変数の影響を意味していると思われる。例えば、野村(1989)が述べるように、権威主義的パーソナリティが「迷信的所信」と正の関連をもつとすると、権威主義に象徴されるような何らかの認知的閉鎖性（例えば構造化欲求や不確実耐性の低さなど）が、「迷信」への肯定的態度と正の相関をもつことが予想される。一方、村山(1997)が指摘するように、われわれの社会における科学は何が真実であるかを定める権威性をもった存在である。このような権威としての科学を万能と考える「科学万能感」もまた、何らかの権威主義や認知的閉鎖性の所産と考えることもできるのではないだろうか。マスメディア接触度の低さについても、これを情報探索動機の低さを意味すると考えると、同様の推測が可能である。この推測が正しいかどうか、またなぜ女性だけにこれらの要因の効果が現われるのかについては、今後の検討に待たねばならない。

以上のような性差は認められるものの、「超能力」と「霊」については、男女ともに精神世界重視の程度が有意に寄与していること、また会話における肯定度がすべての超常現象に寄与していることは一般的傾向と見て良いであろう。「超能力」や「霊」には、人間の潜在能力についての考え方や死生観などが関わっており、人間という存在の根本を省みさせるような超常現象であるため、精神世界重視の程度が有意に寄与したものと思われる。また、どの種類の超常現象でも、娯楽的に会話の中で取り上げられることによって結果的に肯定的態度を形成するという過程（佐藤ら,1992）が存在することを示唆している。

このように、超常現象の種類によってそれを信奉する社会・心理的背景の違いがある程度確認できた。今後、この領域にアプローチする際には、どのような種類の超常現象を問題とするのかを明確にして望むべきであろう。

なお、本研究の結果には以下のような限界もある。①マスメディア接触度については、結果的に、超常現象を「科学で解明できないもの」として扱うマスメディアと「科学的に解明しようとする」マスメディアとに分類して検討することができなかつたため、この変数に関する結果をどのように解釈すべきであるのかに不明な点が残る。②本研究では、マスメディア接触度や会話における肯定度が高いから超常現象に対する肯定的態度が形成される、という方向で解釈してきたが、その逆の解釈（超常現象に肯定的であるからマスメディア接触度や会話における肯定度が高くなる）も成り立つ。この因果関係を確認するには、超常現象信奉度の変化を追うための縦断的研究が必要である。

最後に、超常現象信奉度を含む諸変数に専門分野(理系・文系)による違いは認められなかった。このことは、高校までの理科教育が、不可解な現象に対する科学的な姿勢や科学への肯定的態度を必ずしも育成し得ていないことを示すと思われる。今後、大学における科学教育が超常現象信奉度にどのような効果を及ぼすかが検討されるべきであろう。

また、超常現象信奉度を含む諸変数の多くに明確な性差が認められた。男性より女性の方が「超生命・超文明」以外の3種の超常現象への信奉度が高く、科学に対して否定的で、迷信に関する会話が多い。一方、男性は女性よりマスメディア接触度が高い。これらの性差や超常現象信奉度の規定因の性差がなぜ生じるのかについては、本研究の結果からは不明である。性役割の観点から考えられる可能性として、女性は科学に対する興味や科学に習熟することを男性ほど強く求められないため、科学への否定的態度が男性より強く、結果的にそれが超常現象への肯定的態度を形成することが考えられる。あるいは、本研究では取り上げなかったが、女性の方が男性より頻繁に接触することの多いマスメディア(女性向けファッション雑誌や少女漫画誌など)が超常現象信奉度に影響している可能性もある。先行研究でも一貫して性差が認められている事実を考えれば、その差が生じるプロセスの解明も今後必要となるであろう。

付 記

本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究B 代表 浦 光博(課題番号09410033)による助成を受けて行われた。

引 用 文 献

- 安斎育郎 1995 科学と非科学の間 かもがわ出版
岩永 誠・坂田桐子 印刷中 超常現象に対する肯定的信念の形成に関する研究(1)—個人要因の影響—。広島大学総合科学部紀要IV理系編、24。
松井 豊 1997 高校生が不思議現象を信じる理由 菊池 聡・木下孝司編著 不思議現象—子供の心と教育— 北大路書房、Pp.15-35。
村山 功 1997 不思議現象からみた科学・理科教育 菊池 聡・木下孝司編著 不思議現象—子供の心と教育— 北大路書房、Pp.157-177。
中島定彦 1993 日本版・超自然現象信奉尺度 (安斎育郎 1995 科学と非科学の間 かもがわ出版、Pp.150より抜粋)
中村雅彦 1998 超常的信念を規定する社会心理的条件。渡辺恒夫・中村雅彦著 オカルト流行の深層社会心理 ナカニシヤ出版、Pp.77-111。
NHK放送文化研究所編 1998 現代日本人の意識構造(第4版) 日本放送出版協会
野村 昭 1989 俗信の社会心理 剋草書房
佐藤達哉・渡邊芳之 1992 現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究 心理学評論、35、234-268。